

中日茶農家の交流

市場消費の潜在力は中級茶に

王鵬程

本紙の取材によると、鎮江市農林局と農文協の共同企画により、日本から訪れた5名の茶農家と鎮江の茶名人とが、2日間にわたって交流を行った。そして、昨日、日本の茶農家は大きな収穫をお土産にし、帰国の途についた。地元の茶農家も今回の交流を通じて日本の同業者からたくさんのことを学んだという。

日本の同業者—— 初めて製茶の手作業技術を目の当たりに

丹徒区の上党鎮墅農合作社で、作業員が茶葉炒りの工程を行っているところを見て、日本からの農家さんらは驚きの声を上げながら、次々この貴重な伝統製茶工程の様子をビデオカメラに収めた。

「日本では、今ほとんど機械製茶なので、手作業の製茶工程をみるのは初めてです」と、25歳の下田福臣さんが興奮を隠しきれずに話している。

機械製茶は茶葉の品質を統一すると同時に、すべてのお茶の味も「統一」してしまったため、あくまでも「商品」といえよう。しかし、手作りのお茶は、人によって味が違う。それゆえに、名人の手によって作られたお茶はただの商品だけではなく、「芸術品」にもなるのだと、日本の茶農家さんらは認めた。

農文協職員の張安明さんによると、現在日本では製茶の工業化によるマイナスの影響を反省する茶農家も現れているという。彼らがいうには、「機械化に頼る茶摘みと製茶は、お茶に含まれている文化の要素を薄めてしまった。そもそもお茶は、文化の富んだものなので、文化が乏しくなったら、魂を失ったのも同然だ」とのこと。

一方、取材中に地元製茶工場の工場長から次のような話も耳にした。「茶摘み作業員の減少及び製茶技術の流失で、中国国内の製茶市場も工業化、機械化へ向かうようになってきた」という。

鎮江の茶農家——消費の潜在力は中級茶に

お茶の価格は、両国の茶農家が非常に関心をもつ共通話題だ。日本市場の価格は意外にも思ったより高くないと中国側は言う。一方、中国の高価なお茶の価格を聞いて、日本の茶農家は驚いた。

「高級な「浮雲白茶」は 5600 元/kg の価格で売られています」と、南山茶林研究所の陳武生さんの紹介を聞き、日本の茶農家はみんな驚いた。さらに、「明前茶」は普通でも 2000 元/kg だとの話を聞かされた時に、彼らは思わず「うらやましい」と口をそろえた。なぜなら、実は日本では 600 元/kg 前後が普通の相場だということのだから。

交流を通じて、日中茶農家の間にはこの様な結論が出た。つまり、日本のお茶市場では、2000 元/kg 元以上のものも、200 元/kg 以下のものも少ないが、市場を支配しているのは中級茶である。一方、鎮江の場合は、「両端が大きい、中間が小さい」、すなわち中級茶が不足しているという。

日中のお茶市場における相違は、両国のお茶に関する消費習慣の違いが原因だと思われる。日本では、消費者が栄養や安全問題をより重視するとともに、消費の主力は家庭である。一方、中国では、消費者が茶葉の形状や、茶摘みの時期等にこだわることと、「贈答用」が消費の不可欠な部分であることも特徴である。

中国国内のお茶の消費潜在力はやはり中級茶にあることは、今回の交流を通じて、鎮江の茶農家の間で共通認識になりつつあるようだ。

(記者 王鵬程 「京江晩報」 2008 年 7 月 16 日 第 5 面)